

# 『無量寿経』における一、二の問題

——「如来浄土の果—略説」を中心に——

畝 部 俊 英

## はじめに

漢訳『無量寿経』<sup>1)</sup>について、従来の伝統的な分科では、正宗分が大きく五つに分けられている。すなわち、「如来浄土の因」、「如来浄土の果」、「衆生往生の因」、「衆生往生の果」、「釈尊の勸誡」である<sup>2)</sup>。

筆者は既に幾つかの論文で、梵文と漢訳の『無量寿経』における諸問題を取り上げてきているのであるが、本稿では「如来浄土の果」の最初のところにある「略説」の後半部分（梵文では第17章<sup>3)</sup>にあたる）を取り出し、一、二の問題について考えてみたい。

## 1

この「略説」の後半部分では、極楽なる仏国土には、須弥山などの山や、あるいは海は存在しないことが世尊によって説かれるのに対し、対告衆である阿難は次のように質問する。

世尊、若彼国土、無須弥山、其四天王及忉利天、依何而住<sup>4)</sup>

『無量寿経』における一、二の問題

(世尊よ、もしかの国土に、須弥山なくば、その四天王および忉利天は、何に依りてか住するや。)

すなわち、地居天である四天王や忉利天は須弥山に住しているのであるが、その須弥山が極楽国土にないとすると、「何に依りてか住するや。」という疑問が当然出てくる。

そこで、世尊は阿難に言われる。

第三燄天、及至色究竟天、皆依何住。<sup>5)</sup>

(第三燄天、ないし色究竟天は、みな何に依りてか住するや。)

彼等は、空居天であって、虚空にあり、何ものにも依止すること無く住しているのである。

これに対して、阿難は、

行業果報、不可思議。<sup>6)</sup>

(行業の果報は、不可思議なればなり。)

と答える。そこで、世尊は次のように述べられる。

行業果報、不可思議、諸仏世界、亦不可思議。其諸衆生、功德善力、住行業之地。故能而耳。<sup>7)</sup>

(行業の果報は、不可思議ならば、諸仏の世界も、また不可思議なり。そのもろもろの衆生は、功德の善力をもって、行業の地に住す。故によくしかるのみ。)

## 『無量寿経』における一、二の問題

さて、この個所に対応する梵文『無量寿経』は前述のように第17章であるが、阿難が「行業果報、不可思議。」と答えるところまでは、梵・漢を対照してみるにはほぼ同じである。しかし、次の世尊の言われた言葉は、梵文では以下のようにになっている。

labdhas tvayānandehācintyaḥ karmāṇāṃ vipākaḥ, karmābhisamkāro;  
na punar buddhānāṃ bhagavatām acintyaṃ buddhādhiṣṭhānam.  
kṛtapuṇyānāṃ ca sattvānāṃ avaropitakuśalamūlānāṃ tatrācintyā puṇyā  
vibhūtiḥ.<sup>8)</sup>

(アーナンダよ、この [娑婆] 世界におけるもろもろの業の果報、業の形成が不可思議であることは、そなたによって知られている。しかし、諸仏・世尊の仏力が不可思議であることは、[そなたによって知られて] いない。また、かしこ [極楽世界] では、福德をなし、善根を植えた衆生たちの福德ある力は不可思議なのである。)

不可思議の力によって、極楽国土では須弥山がなくても、四天王や忉利天は自在に住することができるのであると、世尊は述べていられるのであるが、従来、ここに登場する漢訳の「行業果報、不可思議」や「諸仏世界、亦不可思議」は他の経・論中に見出される四不可思議や五不可思議などによって、理解されてきた<sup>9)</sup>。この事について、本稿では、改めて梵・漢の『無量寿経』におけるこの個所の不可思議がどのような不可思議と関連があるのかを、阿含・ニカーヤ経典と大乘の経・論中の主なる不可思議を取り出して、見てみよう。

また、阿難に対して、「この [娑婆] 世界におけるもろもろの業の果報、

『無量寿経』における一、二の問題

業の形成が不可思議であることは、そなたによって知られている。」と言われ、「しかし、諸仏・世尊の仏力が不可思議であることは、[そなたによって知られて] いない。」という言い方、更には、「また、かしこ [極楽世界] では、福德をなし、善根を植えた衆生たちの福德ある力は不可思議なのである。」とあって、上の「この [娑婆] 世界における (iha)」に対して、ここでは、「かしこ [極楽世界] では (tatra)」と対比するような言い方にも何か理由があるように思われる。以下これらの点について考察してみたい。

2

上の梵文中の *karmāṇaṃ vipāka* (もろもろの業の果報)、すなわち漢訳の「行業果報」という言葉は、明らかにニカーヤ經典におけるような四不可思議の一つである *kammavipāka* (業の果報) を意識して用いているように思われる。すなわち、『増支部』 (*Āṅguttara-nikāya*) 經典の一經に、

*cattār' imāni bhikkhave acinteyyāni na cintetabbāni yāni cinto  
ummādassa vighātassa bhāgī assa.*

*katamāni cattāri ?*

*buddhānaṃ bhikkhave buddhavisayo acintetayyo na cinteabbo yaṃ cin-  
tento ummādassa vighātassa bhāgī assa, jhāyissa bhikkhave jhānavisayo  
acinteyyo na cintetabbo yaṃ cinto ummādassa vighātassa bhāgī assa,  
kammavipāko bhikkhave acinteyyo na cintetabbo yaṃ cinto ummādas-  
sa vighātassa bhāgī assa, lokacintā bhikkhave acinteyyā na cintetabbā  
yaṃ cinto ummādassa vighātassa bhāgī assa.*

*imāni kho bhikkhave cattāri acinteyyāni na cintetabbāni yānici cinto*

『無量寿経』における一、二の問題

ummādassa vighātassa bhāgī assāti.<sup>10)</sup>

(比丘たちよ、これらの四不可思議は考えられない。これらを考えるものは狂気、悩害を得るであろう。何が四であるか。

比丘たちよ、諸仏の仏境界は不可思議であり、考えられない。これを考えるものは狂気、悩害を得るであろう。比丘たちよ、禪定者の禪定の境界は不可思議であり、考えられない。これを考えるものは狂気、悩害を得るであろう。比丘たちよ、業の果報は不可思議であり、考えられない。これを考えるものは狂気、悩害を得るであろう。比丘たちよ、世界の思惟は不可思議であり、考えられない。これを考えるものは狂気、悩害を得るであろう。比丘たちよ、これらの四不可思議は考えられない。これを考えるものは狂気、悩害を得るであろう、と。)

とある。

ところで、このニカーヤ經典に対応する阿含經典では、『增壹阿含経』巻第二十一に、

爾時世尊、告諸比丘、有四事。終不可思議。云何為四。衆生不可思議、世界不可思議、竜国不可思議、仏国境界不可思議。<sup>11)</sup>

(その時、世尊はもろもろの比丘に告げたまわく、四事あり。ついに思惟すべからず。いかんが四となすや。衆生は不可思議、世界は不可思議、竜国は不可思議、仏国境界は不可思議なり、と。)

とあり、あるいはまた、同じ『增壹阿含経』の他の經典にも、

舍利弗、当知。如来有四不可思議事。非小乘所能知。云可為四。世界

『無量寿経』における一、二の問題

不可思議、衆生不可思議、竜不可思議、仏土境界不可思議。是謂舍利弗有四不可思議。<sup>12)</sup>

(舍利弗よ、まさに知るべし。如来に四不可思議事あり。小乗のよく知るところにあらず。いかに四となすや。世界は不可思議、衆生は不可思議、竜は不可思議、仏土境界は不可思議なり。これを、舍利弗よ、四不可思議あり、という。)

と、四不可思議が説かれているが、kammavipaka (業の果報) に相当する個所は見当たらない。むしろ、大乘經典である『大宝積経』卷第八・「密迹金剛力士会」に見出される四不可思議の所説に、

如来所宣布四不可思議。以是得成無上正真之道、逮最正覺。何謂為四。所造立業不可思議。志如竜王行不可計。禪思一心不可称限。諸仏所行無有辺際。是為四事<sup>13)</sup>

(如来の宣布するところの四不可思議あり。これをもって無上正真の道を成ずることを得、最正覺に逮ぶ。何をいって四とするや。造立するところの業は不可思議。志、竜王のごとき行は計るべからず。禪志の一心は称限すべからず。諸仏の所行は辺際あること無し。これを四事となす。)

とある中の「所造立業不可思議」の方が、「業の果報の不可思議」(以下、本稿では、このように表す)に近い感じがする。『大宝積経』卷第八十六・「大神変会」には、また、

如仏所説。四種境界不可思議。一者業境界不可思議、二者竜境界不可思議、三者禪境界不可思議、四者仏境界不可思議。以是義故、説一切法、

『無量寿経』における一、二の問題

名大神変。不応驚怖。<sup>14)</sup>

(仏の所説のごとし。四種の境界不可思議あり。一には業境界不可思議、二には竜境界不可思議、三には禅境界不可思議、四には仏境界不可思議なり。この義をもつての故に、一切の法を説いて、大神変と名づく。まさに驚恐すべからざるなり。)

と表されている四不可思議もあり、その第一は、「業境界不可思議」である。

以上のように、『無量寿経』における「業の果報の不可思議」はニカーヤ経典と大乘経典にあり、阿含経典である『増壹阿含経』の二個所に見出される四不可思議には入っていない。

これらの四不可思議には、その項目に相違が認められる。これは不可思議について、さまざまな考えがあったことの反映であろうか。次に取り上げる五不可思議などでも、同じことが言える。

3

ところで、親鸞の『浄土高僧和讃』には、

いつゝの不思議をとくなかに  
仏法不思議にしくぞなき  
仏法不思議といふことは  
弥陀の弘願になづけたり<sup>15)</sup>

一九二

とあって、五不可思議が取り上げられているが、これはよく知られているように、曇鸞の『無量寿経優婆提舍願生偈註』、すなわち『浄土論註』の巻上

『無量寿経』における一、二の問題

において、

然五不可思議中、仏法最不可思議。<sup>16)</sup>

(しかるに、五不可思議の中に、仏法は最も不可思議なり。)

とあり、また卷下において、

諸経統言、有五種不可思議。一者衆生多少不可思議、二者業力不可思議、三者竜力不可思議、四者禪定力不可思議、五者仏法力不可思議。<sup>17)</sup>

(諸経はすべて言う、五種の不可思議あり、と。一には衆生多少不可思議、二には業力不可思議、三には竜力不可思議、四には禪定力不可思議、五には仏法力不可思議なり。)

とあるのに依っていることは明らかであるが、曇鸞自らは鳩摩羅什訳の『大智度論』卷第三十に、

経説五事不可思議。所謂衆生多少、業果報、坐禅人力、諸竜力、諸仏力。於五不可思議中、仏力最不可思議。<sup>18)</sup>

(経に五事不可思議を説く。いわゆる衆生多少、業果報、坐禅人力、諸竜力、諸仏力なり。五不可思議の中において、仏力は最も不可思議なり。)

一九一

とある所説などに基ついて述べているのであろう。この両者の文を対照してみると、『浄土論註』の「二者業力不可思議」と「五者仏法力不可思議」が、『大智度論』ではそれぞれ「業果報」と「諸仏力」となっているのが興味深い。恐らく『大智度論』の方が原文に忠実な訳であると思われる。



『無量寿経』における一、二の問題

ラモットによる『大智度論』のフランス語訳では、「業果報」に当たる個所を

2. la rétribution de l'acte; (karmavipāka)<sup>19)</sup>

としていて、カッコの中に相当するサンスクリット語としては、karmavipākaを入れている。

4

上述のように、『無量寿経』に説かれている「業の果報の不可思議」と何らかの関係があると思われる、阿含・ニカーヤ並びに大乘経・論における四不可思議と五不可思議について紹介してきたが、他の大乘の経・論にも、六不可思議、十不可思議、二十不可思議が説かれている。それらについても取り上げてみよう。六不可思議が説かれているのは、『顕揚聖教論』巻第六である。

不可思議理趣者、略有六種不可思議。一我不可思議、二有情不可思議、三世間不可思議、四一切有情業報不可思議、五証静慮者及静慮境界不可思議、六諸仏及諸仏境界不可思議。<sup>20)</sup>

(不可思議の理趣には、ほぼ六種の不可思議事あり。一には我不可思議、二には有情不可思議、三には世間不可思議、四には一切有情業報不可思議、五には証静慮者および静慮境界不可思議、六には諸仏及び諸仏境界不可思議なり。)

『無量寿経』における一、二の問題

ここでは、「業の果報の不可思議」は「一切有情業報不可思議」と表されている。

『大方便仏報恩経』巻第一にも、次のような六不可思議が説かれている。

当知、如来不可思議、世界不可思議、業報不可思議、衆生不可思議、  
禅定不可思議、竜王不可思議。<sup>21)</sup>

(まさに知るべし、如来は不可思議、業報は不可思議、衆生は不可思議、  
禅定は不可思議、竜王は不可思議なることを。)

この經典においては、上の個所を受けて、次に「此是仏不可思議」とも述べている。

次に、十不可思議が説かれている六十巻『大方広仏華嚴経』巻第三十・「仏不思議法品」は次のようである。

爾時諸菩薩大会中、有諸菩薩、作如是念。諸仏刹土不可思議、諸仏浄願不可思議、諸仏種姓不可思議、諸仏出世不可思議、諸仏法身不可思議、諸仏音声不可思議、諸仏智慧不可思議、諸仏神力自在不可思議、諸仏無礙住不可思議、諸仏解脱不可思議。<sup>22)</sup>

(その時、もろもろの菩薩の大会の中に、もろもろの菩薩ありて、かくの如き念をなす。諸仏の刹土は不可思議、諸仏の浄願は不可思議、諸仏の種姓は不可思議、諸仏の出世は不可思議、諸仏の法身は不可思議、諸仏の音声は不可思議、諸仏の智慧は不可思議、諸仏の神力自在なることは不可思議、諸仏の無礙にして住することは不可思議、諸仏の解脱は不可思議なり、と。)

『無量寿経』における一、二の問題

この經典では、諸仏に限定した十不可思議が説かれているので、上で見てきた不可思議とは少し違うようである。但し、梵文『無量寿経』の buddhānām bhagavatām buddhādhiṣṭhāna (諸仏・世尊の仏力) と、この『華嚴経』の十不可思議の「諸仏神力自在不可思議」とはほぼ同じものであろう。

最後に、二十不可思議が説かれている『首楞嚴三昧経』巻下を引用してみよう。

復得二十不可思議功德之分。何等二十。福德不可思議、其智不可思議、其慧不可思議、方便不可思議、弁才不可思議、法明不可思議、総持不可思議、法門不可思議、憶念随義不可思議、諸神通力不可思議、分別衆生諸所語言不可思議、深解衆生心之所樂不可思議、得見諸仏不可思議、所聞諸法不可思議、教化衆生不可思議、自在三昧不可思議、成就淨土不可思議、形色最妙不可思議、功德自在不可思議、修治諸波羅蜜不可思議、得不退轉仏法不可思議、是為二十。堅意、若人書写読誦是首楞嚴三昧、得是二十不可思議功德之分。<sup>23)</sup>

(また二十不可思議の功德の分を得ん。何等をか二十とするや。福德不可思議、其の智不可思議、其の慧不可思議、方便不可思議、弁才不可思議、法明不可思議、総持不可思議、法門不可思議、憶念随義不可思議、諸神通力不可思議、衆生のもろもろの語言するところを分別すること不可思議、深く衆生心の楽うところを解すること不可思議、諸仏を見得ること不可思議、諸法を聞くところ不可思議、衆生を教化すること不可思議、自在の三昧不可思議、淨土を成就すること不可思議、形色の最妙なること不可思議、功德自在不可思議、もろもろの波羅蜜を修治すること不可思議、仏法を退轉せざることを得ること不可思議なり。これを二十となす。堅意よ、もし人この首楞嚴三昧を書写し、読誦せば、この二

『無量寿経』における一、二の問題

十不可思議の功德の分を得ん。)

これも四不可思議や五不可思議の系列とは違うようであるが、『無量寿経』の梵文に、

kr̥tapuṇyānām ca sattvānām avaropitakuśalamūlānām tatrācintyā puṇyā vibhūtiḥ.<sup>24)</sup>

(また、かしく [極楽世界] では、福德をなし、善根を植えた衆生たちの福德ある力は不可思議なのである。)

とあるところが、この二十不可思議の最初の「福德不可思議」と似ているのは、単なる偶然のことだろうか。

5

『無量寿経』において、極楽に須弥山が無いことに対する阿難の質問は、「第三燄天、ないし色究竟天は、みな何に依りてか住するや。」という世尊の反問によって既に答えられている。すなわち、先に一言述べておいたように、第三燄天や色究竟天は虚空にあって、何にもものにも依止すること無く住している。それならば、極楽における四天王や忉利天も須弥山が無くても住することができるのである。この事は『平等覚経』巻第三に次のように述べられている。

仏言、無量清浄仏国無有須弥山者、亦如是。第一四天王、第二忉利天、皆自然在虚空中住止。無所依因也。<sup>25)</sup>

『無量寿経』における一、二の問題

(仏言わく、無量清浄仏の国に須弥山有ること無きは、また、かくの如し。第一四天王、第二忉利天は、みな自然に虚空の中にあつて住止する。依因るところ無きなり、と。)

ところで、『平等覚経』（『大阿弥陀経』も）には、この文の次に不可思議についての所説は見られない。『無量寿経』などの、いわゆる後期無量寿経において、不可思議は登場してくる。そこで、後期無量寿経の一つである『如来会』（『大宝積経』巻第十八）が不可思議について述べている個所を見てみよう。阿難が答えて言うところから取り上げる。

世尊、不可思議業力所致。仏語阿難、不可思議業汝可知耶。答言、不也。仏告阿難、諸仏及衆生善根業力汝可知耶。答言、不也。<sup>26)</sup>

(世尊よ、不可思議の業力の致すところなり、と。仏は阿難に語りたまわく、不可思議の業を汝は知るべけんや、と。答えて言わく、いななり、と。仏は阿難に告げたまわく、諸仏および衆生の善根の業力を汝は知るべけんや、と。答えて言わく、いななり、と。)

このような言い方は、梵文、チベット語訳、漢訳、いずれの『無量寿経』とも異なる。但し、「不可思議業力」と「不可思議業」は *karmāṇām vipāka* に、「善根業力」は *puṇyā vibhūti* に対応すると思われる。なお、チベット語訳のこの個所が多少増広されていることは既に指摘されている。<sup>27)</sup>

『無量寿経』には、更に、願文が三十六願である『大乘無量寿莊嚴経』と言う異系の経典がある。この経典にも不可思議が説かれているので、その個所を見てみよう。

やはり阿難の発言のところから取り出すこととする。

『無量寿経』における一、二の問題

業因果報不可思議。仏告阿難、汝身果報亦不可思議。衆生業報亦不可思議。諸仏聖力不可思議。<sup>28)</sup>

(業因の果報は不可思議なればなり、と。仏は阿難に告げたまわく、汝が身の果報もまた不可思議なり。衆生の業報もまた不可思議なり。諸仏の聖力も不可思議なり、と。)

これまた、内容が少し違う。但し、「業因果報」は *karmāṇāṃ vipāka* に、「諸仏聖力」は *buddhānāṃ bhagavatāṃ buddhādhiṣṭāna* に対応すると思われる。

6

『大乘無量寿莊嚴経』の「諸仏聖力」が梵文『無量寿経』の *buddhānāṃ bhagavatāṃ buddhādhiṣṭāna* に対応すると思われると述べたが、漢訳『無量寿経』では、この語に対応するものはなく、「諸仏世界」<sup>29)</sup> となっている。これは阿含・ニカーヤの四不可思議の一つである *buddhānāṃ buddhavisaya* (諸仏の仏境界)<sup>30)</sup>、「仏国境界」<sup>31)</sup>、「仏土境界」<sup>32)</sup> または大乘の経・論の「仏境界」<sup>33)</sup>、「諸仏及諸仏境界」<sup>34)</sup> と対応するように見える。

とするならば、梵文と漢訳の『無量寿経』はそれぞれ異なった系列の不可思議を取り入れていることになる。

一  
八  
五

さて、この *buddhānāṃ bhagavatāṃ buddhādhiṣṭāna* に対する従来の和訳は、次のようである。

(a) 諸覚者世尊ノ為メニハ覚者ノ地位…

『無量寿経』における一、二の問題

(南条文雄訳『支那五訳対照 梵文和訳仏説無量寿経・支那二訳対照 梵文和訳仏説阿弥陀経』、1908年、156頁、以下(a)訳という。)

(b) …仏ノ所在…

(大谷光瑞『梵語原本国訳 無量光如来安楽莊嚴経』、1929年、71頁、以下(b)訳という。)

(c) 諸仏世尊の…加被…

(荻原雲来訳『梵和对訳 無量寿経』(『浄土宗全書』23 梵漢和英合璧浄土三部経 所収)、1931年、85頁、以下(c)訳という。)

(d) 目ざめた人たち・世尊たちの、仏の加護…

(中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経』(上)、岩波文庫、第25刷改訳発行、1990年、67頁、以下(d)訳という。)

(e) 尊き仏たちの仏としての加護…

(岩本裕訳『大無量寿経』(『仏教聖典選』第6巻(大乘経典(四)所収)、1974年、353頁、以下(e)訳という。)

(f) 仏・世尊たちの仏の加護…

(藤田宏達訳『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』第2刷、1979年、95頁、以下(f)訳という。)

(g) 諸仏・世尊の仏の加護の力…

(山口益・桜部建・森三樹三郎訳『無量寿経』(『大乘仏典』6、浄土三部経)、1976年、51頁、以下(g)訳という。)

以上のような訳を見てみると、(f)訳のように註の210-211頁において「なお、業の果報と仏の加護の不可思議については、『大宝積経』巻86(『大正蔵』11巻、493頁下、『大智度論』巻30(同上25巻、283頁下)など参照。)<sup>35)</sup>とあって、訳者は当然四、あるいは五不可思議のことは承知しているのであるが、

### 『無量寿経』における一、二の問題

一つ一つの不可思議には十分な注意が払われなかったのか、buddhāhiṣṭāna について、(a)訳の「覚者ノ地位」、(b)訳の「仏ノ所在」、(c)訳の「加被」、(d)訳から(e)訳の「仏の加護」または「仏の加護の力」のうち、どれ一つとして、適訳と思えるものは見当たらない。

梵文『無量寿経』の、この個所における buddhānam bhagavatām buddhāhiṣṭāna は既に見てきたように、『大智度論』では「諸仏力」、六十卷『華嚴経』では「諸仏神力自在」、『大乘無量寿莊嚴経』では「諸仏聖力」とあるような、仏陀の偉大な力用の全体を意味する「諸仏・世尊の仏力」であって、「加護」というような、仏陀の力用の一つではないように思われる。

### おわりに

さて、本稿の初めの方で阿難に対して、「この [娑婆] 世界におけるもろもろの業の果報、業の形成が不可思議であることは、そなたによって知られている。」と言われ、「しかし、諸仏・世尊の仏力が不可思議であることは、[そなたによって知られて] いない。」という言い方にも何か理由があるように思われる。」と述べた点について言及しておかなければならない。

阿含經典の四不可思議を説く個所として、『増壹阿含経』巻第21の文と共に巻第28の個所を挙げたが、その中に「非小乘所能知」という文がある、—この經典の大乗的傾向か、このような文言があるのであるが—、この例に倣って言うならば、「この [娑婆] 世界におけるもろもろの業の果報、業の形成が不可思議であることは、そなたによって知られている。」という梵文『無量寿経』の言い方は、あえて言えば、「小乘所能知」、すなわち部派所伝のニカーヤ經典の四不可思議の中にもあるのであるが、「しかし、諸仏・世尊の仏力が不可思議であることは、[そなたによって知られて] いない。」という



### 『無量寿経』における一、二の問題

のは、「非小乗所能知」、すなわち大乘のみ知るところである、ということではないか。とすれば、「また、かしこ [極楽世界] では、福德をなし、善根を植えた衆生たちの福德ある力は不可思議なのである。」というのは、文言どおり、極楽のみにある不可思議ということになる。『首楞嚴三昧経』の「福德不可思議」と、言葉は同じようであるが、内容は異なるのであろう。

### 註

- 1) 以下『無量寿経』とのみ表す場合は、漢訳(『大正蔵』12巻、265、下段-279頁、上段)、梵文(atsuuji Ashikaga, Sukhāvātīvyūha、以下 Sukh. と表す。また、いちいち注記しないが、藤田補正表(藤田宏達訳『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』所収を参照する。)、チベット語訳(『浄土宗全書』23、「梵漢和英合璧浄土三部経」所収、河口慧海、諸訳対校「蔵和对訳 無量寿経」、220-339頁)の『無量寿経』の総称として用いる。
- 2) 例えば、柏原祐義『浄土三部経講義』、19-20頁。
- 3) Sukh., pp. 33-34。
- 4) 『大正蔵』12巻、270頁、上段。
- 5) 同上。
- 6) 同上。
- 7) 同上。
- 8) Sukh., p. 34。
- 9) 例えば、香月院深励『浄土三部経講義 1 無量寿経講義』(香月院深励著作集五、1980年、法蔵館刊)、524-525頁。
- 10) aṅguttara-nikāya (以下、AN. と略称)、vol. II. (PTS.), p. 80。
- 11) 『大正蔵』2巻、657頁、上段。
- 12) 同上、640頁、上段。
- 13) 『大正蔵』11巻、43頁。下段。
- 14) 同上、493頁、下段。
- 15) 『親鸞聖人全集』・「和讃篇」、92頁の「専修寺蔵真蹟本」による。「文明五年開板本」では、「弥陀の弘願」が「弥陀の弘誓」となっている。
- 16) 『大正蔵』40巻、831頁、中段。
- 17) 同上、836頁、中段。
- 18) 『大正蔵』25巻、283頁、下段。

『無量寿経』における一、二の問題

- 19) Etienne Lamotte, *Le Traite de la Grande Vertu de Sagesse*, 1976, Louvain. p. 1983.
- 20) 『大正蔵』 31巻、510頁、下段。
- 21) 『大正蔵』 3巻、128頁、上段。
- 22) 『大正蔵』 9巻、590頁、中段。
- 23) 『大正蔵』 15巻、645頁、中段。
- 24) Sukh., p. 34.
- 25) 『大正蔵』 12巻、291頁、下段。
- 26) 『大正蔵』 11巻、96頁、下段。
- 27) 藤田宏達、前掲書の註、210頁、下段。
- 28) 『大正蔵』 12巻、322頁、下段。
- 29) 同上、270頁、上段。
- 30) AN. vol. II, (PTS.), p. 80.
- 31) 『増壹阿含経』 卷第21 (『大正蔵』 2巻、657頁、上段)。
- 32) 同上、卷第18 (『大正蔵』 2巻、640頁、上段)。
- 33) 『大宝積経』 卷第86 (『大正蔵』 11巻、463頁、下段)。
- 34) 『顕揚聖教論』 卷第6 (『大正蔵』 31巻、510頁、下段)。
- 35) (25) に同じ。

AN. II. (PTS. AN. vol II. p. 80)	1. buddhā- nām buddha- visaya (諸仏 の仏境界)	2. jhāyissa jhāna-visaya (禅定者の 禅定境界)	3. kamma- vipāka (業の 果報)	4. lokacintā (世の思惟)						
増吉阿含經 卷第21 (大正藏2、p.67, a)	4. 仏国境界			2. 世界	1. 衆生	3. 竜国				
増吉阿含經 卷第28 (大正藏2、p.60, a)	4. 仏土境界			1. 世 (世十界 ②、⑧)	2. 衆生	3. 竜				
大宝積經 卷第8 (大正藏11、p.43, c)	4. 諸仏所行	3. 禅思一心	1. 所造立業			2. 志如竜王 行				
大宝積經 卷第86 (大正藏11、p.43, c)	4. 仏境界	3. 禅境界	1. 業境界			2. 竜境界				
大智度論 卷第30 (大正藏25、p.23, c)		3. 坐禅入力	2. 業果報		1. 衆生多少	4. 諸竜力	5. 諸仏力			
浄土論註 卷下 (大正藏40、p.83, b)		4. 禅定力	2. 業力		1. 衆生多少	3. 竜力	5. 仏法力			
大方便仏報恩經 卷第1 (大正藏3、p.12, a)		5. 禅定	3. 業報	2. 世界	4. 衆生	6. 竜王	1. 如来			
顯揚聖教論 卷第6 (大正藏31、p.50, c)	6. 諸仏及 諸仏境界	5. 証靜慮者 及靜慮境界	4. 一切 有情業報	3. 世間	2. 有情			1. 我		
無量寿經 卷上 (大正藏12、p.20, a)	2. 諸仏世界		1. 行業果報						3. 功德善力	
Sukh. (梵文無量寿經) (足利本、p.34)			1. karmā- nām vipāka (もろもろの 業の果報)				2. buddhā- nām... budd- hāsiṣṭhana (諸仏の仏力)		3. puṇyā vibhūti (福德ある力)	

1. 本稿で取り上げた「四、五、六不可思議」を表にした。
2. 各「不可思議」の前の番号は、経論に出ている順番を表わした。
3. 『無量寿経』(漢・梵)の「不可思議」を最後に加えた。